
紅イ月

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い月

【Nコード】

N5899P

【作者名】

琅來

【あらすじ】

百合という名の姉と、百々という名の妹。この二人と、紅い満月が揃う時に起こる悲劇とは。

第一章「平成ノ世、新暦ノ神無月」(前書き)

このシリーズは、全体を通して流血表現が出て来ます。苦手な方は、どうかご遠慮下さい。

また、時代考証などは一切行っておりませんので、ご了承ください。
これは、あくまでもフィクションです。

第一章「平成ノ世、新暦ノ神無月」

百合ゆりという花の名前を持つ少女は、とても焦って自転車をこいでいた。

今の時刻は、もう六時を過ぎ掛けている。

（ああ、急がなきゃ！ もうこんなに真っ暗だし！ ついこの前までは、この時間になっても明るかったのに〜！）

だから、つい友達の家で長居してしまったのだ。

百合は、ついこの間九歳になったばかりの、まだ幼い少女である。百合はその暗さに、僅かながらではあるが恐怖心を抱いていた。

（あゝあ……こんなに暗くなるんだったら、もっと早く出るんだっ
た……）

そう思っても、既に後の祭りである。

（ま、あんまり出たくなかったって言うのが、本音なんだけど。だって今、うちにはパパもママもないし……）

だから、百合は家に帰っても、たった一人きりなのである。

それが寂しくて、結局ズルズルと長居してしまったのだ。

しかし、何故父も母も家にいないのか？

（うん……だって、パパもママも今、病院にいるしなあ……それに、まだ一度も会ったことないけど……あたしの妹の……百々ももも）

彼女の母は、数日前から出産の為に病院に泊り込んでいる。

そうして、今日の夜中……午前一時頃、ようやく妹が産まれたのだ。

『百々』と名付けられた、九歳年下の妹が。

どうして自分が百合なのに妹が百々なのか、百合には全く分からない。

『百』という漢字を見なければ、共通点など何もないのだ。これが姉妹だとは、ちよっと思えない。

そして本当ならば、百合もこの日、病院に行くはずだった。

（ママの『サンゴノヒダチ』が悪いからあんまり負担掛けちゃいけないって、あたしも連れてってくれなかったんだよねあ。『サンゴノヒダチ』って、何だろ？ てか、そんなことよりも、あたしもママと妹に会いたかったなあ……パパの馬鹿）

軽く空を見上げると、いくつかの星が見える。

綺麗に晴れた空だった。

視線を目の前に戻すと、ふと、自分の通う小学校が目に入った。それを見た途端、思わず百合の顔に笑みが浮いた。

百合の家はその近くなので、この暗闇の中で小学校を見ると安心した。

百合が、視線をふと小学校の上に巡らせた、その時だった。妙な物が、百合の目に飛び込んだ。

どうして今まで気付かなかったのかと、訝しむ物でもあった。

それは、校舎にその下の一部が隠れる程低い位置にある、紅い…

…紅い、満月だった。

それを見た途端、百合の腕にゾツと鳥肌が立った。

百合は思わず自転車を止め、しげしげとその満月を見詰めた。

僅かの好奇心と、恐怖を併せ持って。

その月は、驚く程に紅かった。

まるで、流されたばかりの、血のように。

百合は、鳥肌の立った腕をさすると、再び自転車をこぎ始めた。

先程とは違い、泣きそうな顔になって、百合は角を曲がった。

そして少し勢いを付けて坂道を下っていると、いきなり自転車の

ライトの範囲内にある物が飛び込んで来て、百合は驚いてブレーキ

を掛け、そして、勢いを殺し切れずに、横倒しになってしまった。

顔を上げると、暗闇に融けて消えてしまいそうな程に真っ黒な黒

猫が、金色に爛々と光る目でこちらを見返していた。

百合は、ほっと安堵して軽く息を付いた。

「良かったあ……轢かれなくて良かったねえ？ 猫ちゃん？」

百合は笑い、黒猫に向かって手を伸ばした。

だが、触られることを嫌ってか、黒猫はその手を掻い潜ると、闇に溶け込んで行ってしまった。

「あゝあ……ちょっと、残念だなあ……」

百合が、倒れたままの身体を起こそうとしたその時　いきなり、辺りが明るくなった。

見ると、曲がって来た車が背後から近付き、視界一杯に広がる。倒れ込んでいたせいで、車は自分のことが見えなかったのか……。大きなクラクションを鳴らし、耳が痛い程のブレーキの音を響かせ、車が近付いてくる。

百合は慌てて立ち上がったが、足首を捻ってしまったのか、足が痛くて歩けずに、再びへたり込みそうになった。

それ以上に、あまりの恐怖に身体が動かない。

百合は近づく車を、ただただ見詰めることしかできなかった。

車のヘッドライトが、痛い程目に沁みる。

（あ……これ、多分うちの車だ……じゃあ、きっとパパが運転してるんだよね、これ……）

全ては、一瞬の出来事だった。

鈍い痛みと共に、百合は跳ね飛ばされた。

そして、道路の上に倒れ込んだ。

生暖かい　空の、紅い満月のように紅い血が流れているのが、はつきりと分かる。

車から飛び出て来る人の姿が、ぼんやりと見えた。

（あ……やっぱり、パパだ……）

秋斗^{あきと}は、真っ蒼になって車から飛び降りた。

妻の調子が良くなったので、早く家に帰れそうだと急いでいたら、その、まさに急いでいた理由である娘を……百合を、自分が轢いてしまったのだ。

秋斗が急いで百合の傍に近寄り、その小さな身体を抱え上げると、

百合は父の姿を認めたのか、弱々しく微笑んだ。

そして、一体何を感じたのか　恐らく、驚きによるものに大きく目を瞠ると、九歳の子供には似合わない、自嘲するような笑みを浮かべ……そして、瞳を閉じ、静かに事切れた。

「百合……百合っ？　おい……しっかりしろ……しっかりしろっ！

おい、百合っ！」

秋斗の悲しげな悲鳴が、辺りに響き渡った。

百合の目が開くことは、二度となかった。

空からは、皓々と輝く紅い満月が、二人を見下ろしていた　。

第一章「平成ノ世、新暦ノ神無月」(後書き)

神無月：十月の異称。

第二章「江戸ノ世、旧暦ノ師走」

「ごめんね、百合^{ゆり}、百々^{もも}。こんなもんしか食べさせてやれなくて……」

「だいじょうぶだよ、かあさん。だって、とりもおさかなもたべちゃいけないでしょ？ それに、ももが生まれたときからずっとこうだったし、ももはきにしてないよ？」

五歳の百々は首を傾げて言い、十一歳の百合は、小さく頷いた。今の世は、江戸時代、元禄十四年。

後世にも悪名高い、徳川綱吉の制定した『生類憐みの令』と呼ばれる一連の法のうち、最初に出された法から数えて、既に十四年が経っていた。

二人とも、産まれてこの方、肉などという物は口にすることがない。

もし肉を食べたことがばれようものなら、たちまち捕まってしまうのだ。

百合は、椀の中に残っているさもしい雑炊を見て、小さく溜息を付いた。

自分達が産まれる前からずっと続いている法なのに、今、母がそう言うのは、理由が決まっていた。

二日前に、父がお犬様を殺したとして、捕まってしまったからだ。だが、その本当の理由は、野犬に襲われた幼子を、犬に石を投げ付けて助けたということなのだ。

この法がなければ仕方のないことで片付けられるだろうが、現実とは違う。

（父さんは、何にも悪いことしてないのに。むしろ、いいことしたのに……）

百合などはそう思うのだが、現実は厳しい。

そして、そのせいで働き手を奪われてしまった百合達一家は、母

の内職で何とか保っている状態で、食い繋ぐのすらやっとだ。

しかし人の噂によると、六年前の大飢饉の頃から犬小屋という物が作られ、そこで犬は人にも勝る素晴らしい食生活を送っているらしい。

怒るよりも何よりも、あまりのことに呆れ果てる他ない。

（將軍様、人よりも犬が大事みたいだし……だから父さんは……）

百合は思わず悲しくなり、小さく首を振った。

（考えても仕方ないよ。……だって、罰金払えって言われてもうちにはそんな大金ないし、だから、多分牢屋に……）

「それじゃあ頼んだよ、百合、百々。もうこんなに暗いんだから、二人だけでお使いに出すのは心配なだけだねえ……」

「何言ってるんの？ 母さん。あたし、もう十一だよ？ もう日は暮れ掛かってるけど、二人でお使いぐらいできるから。それに、これ届けるだけでお駄賃が貰えるんだから、悪い話じゃないし」

父が野犬を殺したとして捕まったのは、既に隣近所へ知られていて、まだ幼い二人の娘を不憫に思ったのだろうか、ちよつとした仕事やお使いを、僅かではあるが駄賃を払って頼む人が増えていた。

今回ののもその口で、少し離れた所に住んでいる娘夫婦に届け物をしてくれと、同じ長屋に住んでいる老婆が頼んで来たのだ。

百合としては、荷物を運ぶだけで少しでもお金が貰えるので、喜んでやるうと思っている。

そして百々も一緒だと、その分お駄賃を弾んで貰えるのだ。

だから百合は、今日も百々を連れてお使いに行こうとしていた。

「じゃあ、気を付けてねえ、二人とも」

「はいはい。分かってるって」

「だいじょうぶだよ、かあさん。ねえさんはすつごくつよいんだから！ ちゃーんとももをまもってくれるんだから！ ねえ、ねえさん？」

「うん、百々。百々は、あたしがちゃんとして護つてあげるからね？」
「うん！ あのねかあさん、このまえ、ももがすずちゃんといつしよにあそんでたら、へんなひとがきて、へんなこときいてきたけど、ねえさんがおっぱらつてくれたんだよ？」

「はいはい。百々、それはもう三回目よ？」

母が諭すと、百々は大きく目を瞠った。

「えーっ？ そうだっけ？」

「いいから、もう行くよ？ 百々。このままじゃあ、帰って来る頃にはもう夕ご飯の時間過ぎちゃう」

「え！ それやだっ！ じゃあ、いこっ！」

百々は駆け出して行ってしまう、百合は慌ててそれを追い掛けた。

「おはつはふえ、ふええあん。ふおんふあういほるあえへ」

「百々、口一杯物入れながら喋らないの。何言ってるか分かんないよ？」

「んっ」

百々はゴクンと口の中に入っていた物を飲み込むと、笑って言った。

「ももね、『よかったね、ねえさん。こんなにもらえて』っていったの。だって、にこもおにぎりくれたんだよ？ それに、かあさんにつてもういっこも！」

百々のはしゃいだ声に、百合も笑って言った。

「うん。あたしも凄く嬉しいわ。母さんも、これでちょっとは助かるね」

「うん！」

いくら姉とはいえ、百合もまだ十一歳の、育ち盛り、食べ盛りの少女である。

食べる物が少ないというのは、百々以上に辛いことだった。

「あ、ねえさん！ みて、おつきさまっ！」

百々のはしゃいだ声につられて空を見上げると、紅い色をした満月が光り輝いていた。

「うわあ……きれ……。すつごい、すてきだねえ……」

百々の言葉に、百合は眉をひそめた。

「そう？ あたしには不気味で不吉な月にしか見えないけど……」
百合は眉をひそめた。

事実、百合の腕には、寒さのせいだけではない鳥肌が立っていた。しかし、その言葉に百々が猛反発した。

「ちがう！ 『つき』じゃなくて、『おつきさま』っ！ それに、ぜんぜんぶきみでもふきつでもないもんっ！ ねえさん！」

「はいはい。もう行くわよ？ 止まってないで、さっさと歩いて」「うん。わかった。あともうちよつとでうちにつくんだよね？」

「うん、そうね。でも、走って転んだら……あっ、ちよつと、百々！」

いきなり、百々は百合の手を引っ張って走り出した。

「ほら、ねえさん！ あともうちよつとだから！ いそごっ！ ね？」

百合と百々の身長差は、一尺（約三十センチ）程もある。

だから、しきりに手を引っ張る百々に合わせていると、自然と百合の姿勢は低くなり、前屈みで走るようになってしまった。

そして、そんな無理な姿勢がいつまでも続く訳がない。

走り出していくらも経たないうちに、百合は大きく体勢を乱し、転び掛けてしまった。

驚いた百々が、思わず手を放したせいで転ばずに済んだが、その拍子に、大事に抱えていたお握りが転がり落ちてしまった。

「あっ！」

百合は思わずそれを拾いに行こうとしたが、不意に足元の泥に足を捕られ、転んでしまった。

昨日に降った雪が、融け掛けていたのだろう。

「だいじょうぶっ？ ねえさんっ！」

「だ……大丈夫よ。ちよつと、転んじやつただけだから……」

「よかったあ！ あ、じゃあもも、おにぎりひろつてくるねっ！」
百々はそう言つと、駆け出して行つてしまった。

「氣を付けて、百々。あたしみたいに、転ばない、で……」

百合の言葉は、途中で途切れてしまった。

案の定と言つべきか、百々も途中で転んでしまったのだ。

だが、しっかりと握りは掴んでこつちに駆け戻つて来る。

「ねえさん！ もつてきたよっ？」

「うん。ありがと、百々。でも、帰つたら母さんに怒られちゃうね」
「どおして？ もももねえさんも、ちゃーんとおつかいしたんだよ？」

「あのね、お使いはちゃんとしたけど泥だらけになつて歸つて来たら、洗濯する手間が増えるの。今は冬だし。だから、怒られちゃう」

「ふーん……」

百々は唇を尖らせて言つと、立ち上がった百合にお握りを渡した。
「ねえさん、これ、ちゃーんとつつんであったから、なかはよこれてないよ？」

「うん。そうね」

百合が百々の頭を撫で、歩き出そうとした、丁度、その時だった。
ガルルルウ、という獣の唸り声が聞こえ、百合ははつとした。
背後を見ると、爛々と光る目がいくつもある。

そしてその背後には、大きくて丸い、紅い月が見える。

まるで、犬ではなくて狼が、紅い満月を従えているかのようなだ。

「ねえさん……」

百合が見下ろすと、百々は必死に百合の足に縋り付いていた。

「百々……逃げるわよ」

「でも、あれつておいぬさまだよ……？ どうやってにげるの……？」

百々は、泣きそうな目で百合を見上げた。

「母さんに申し訳ないけど、これを使うわ。そうすれば、時間が稼

げる」

百合はそう言うとお握りを野犬の群れに向かって投げ付けた。さすがは犬と言うべきか、投げられてまだ空中にあるうちに、野犬達はお握りに向かって跳びかかった。

だが、百合はそれを見ていなかった。

投げ付けると同時に百々の手を引いて走り出したのだ。

百合は背後を振り返らずに、必死に走った。

（長屋まで……せめて長屋まで行けば、あいつらもきつと諦めてくれるはず……だから、それまでっ！）

しかし、五歳の妹を連れてだから、勢い良くは走れない。

いくらもしないうちに、犬達が追って来る気配がした。

あまりの恐怖に怯えてしまったのか、百々の足が止まり掛け、そのせいで大きく足元を乱してしまい、百々は転んでしまった。

「……！ 百々っ！」

百合が慌てて助け起こすと、もうすぐに、犬が迫っていた。

「百々。……百々は、逃げなさい」

百合は、静かな声で言った。

「……でも、ねえさんは……？」

百々の泣きそうな顔に向かって、百合は小さく笑った。

「大丈夫。あたしが犬を追っ払うから百々は逃げて。それで、母さんとか大人呼んで。そうすればあいつらも諦めるだろうから。あたしが助かるかどうかは百々に懸かってるんだからね？ 一生懸命走って逃げて」

「うん……うん、わかった……」

百々は、泣きじゃくりながらそう言い、一目散に走り出した。それを微かに笑いながら見送ると、百合は足元を探った。

（石があれば、ちよつとは足止めができるわ。何かないかしら……？）

ふと、百合の視界にある物が入った。

（これ……木の棒だわ。お誂え向きじゃないの）

百合はその棒を手にとると、構えた。

刀の持ち方などは全く知らないが、だいたいこんなもんだらうと見当を付け、しっかりと握り締める。

すると ふと、百合の脳裏に痛みが走った。

それと同時に軽い目眩がし、足元が僅かにふらつく。

その隙を逃さずに、野犬達は百合に向かって跳びかかって来た。

百合は必死で棒を振り回し、野犬達を殴り付けた。

そのうちにも、どんどん目眩は酷くなり、吐き気までしてきた。

そして……『ある物』が、百合の脳裏に蘇った。

だが、それを詳しく吟味している暇はなかった。

百合は必死に野犬達を棒で殴り付けていたが、ついにその時が来た。

一匹の野犬が棒を掻い潜り、腕に噛み付いた。

それを皮切りに、野犬達が百合の振るう棒をくぐり抜け、身体中に噛み付いた。

百合は、紅い血を流しながら、その場にゆっくりと倒れた。

（もう、あたしにできることは、何もない……）

百合はそつと視線を巡らせて、百々の姿を搜した。

だが、どこにもその姿はない。

（良か、った……逃げ切れたんだ……百々……。良かったあ……）

そのことに安堵した途端、百合の脳裏に蘇った『ある物』を吟味する余裕が、生まれた。

……生まれて、しまった。

それを吟味した途端、百合の顔にはただただ驚愕のみが浮かんだ。

そして、その百合の喉元に野犬が噛み付き 信じられないとい

う表情を最期の表情として、百合は事切れた。

その死体を、野犬達が喰い荒らす。

近くに住んでいる者達も、関わり合いたくないので、放って置く。

その百合の死体と、それを貪る野犬達を、紅い満月は、ただただ、冷たい光を放って、静かに見下ろしていた。

第二章「江戸ノ世、旧暦ノ師走」(後書き)

師走…十二月の異称。ここでは陰暦であるから、現在の一月頃に相当する。

第三章「平安ノ世、旧暦ノ水無月」

この頃はあまり雨が降っていないが、夏ということもあり、ねつとりとした暑さになっている。

百合は、東北の対にある自室で、あまりの暑さにへたり込んでいた。

その百合の隣には、腹心の女房である淡雪が控えている。

「……姫様。大丈夫でございますか？」

「これが大丈夫に見えたら、お前の目は節穴だわ」

百合はそっぽを向いて言った。

十五歳の少女にしては、その動作はどこか子供っぽい。

「では……やはり、あのことを気に病んでおられるので……？」

淡雪の言葉に、百合はバン、と床を叩いた。

「……気付いているのなら、言わないで頂戴っ！」

百合の怒りに満ちた顔と声に、淡雪は俯いた。

百合はそれに気まずくなり、更にそっぽを向く。

『あのこと』とは、十五歳になったばかりの百合にとって、まだ考えたくないこと。『結婚』のことである。

この平安の世では十二、三歳で結婚することも行われてはいるが、百合にはまだ考えられないことだった。

しかもその相手というのが、ぎりぎり貴族と数えられる従五位下の相模国の国守である受領の息子で、おまけに持っている位階は従八位上である。

しかも、歳は既に二十四になっているのだ。

受領は金持ちだから、政略結婚の相手として薦められているのだろつが、仮にも自分は、藤原の血を引く従三位の中納言を父に持つ身だ。

しかも、自分は長女なので、自分と結婚する相手が、将来この家を継ぐのである。

金目当てに、いくら上国の受領とはいえ、従八位上の受領の息子などと結婚したくはなかった。

受領よりも金がなくても、もう二十四になっていたとしても、せめて正六位しょうぐいか従五位ぐらいの位を持つている相手にして欲しかった。それに、まだ従八位上では、藤原の流れを汲むこの中納言家の次期当主として、相応しいとは決して言えない。

「暑いわ、淡雪。釣り殿つりどのまで行くから、付いて来て頂戴」

「はい、姫様」

百合はそう言つて檜扇ひのあふぎを持つと、部屋を出て行つてしまった。

「やはりここは涼しいわ。そうは思わないこと？ 淡雪」

「はい。大変涼しゅうございますね、姫様」

百合は目の前にある大きな池を眺め、頬を撫でる風に目を細めた。ささくれ立っていた気分が、落ち着くのが感じられる。

その時だった。

「あら？ こんな所に先客がいるとは思ひもありませんでしたわ。そうは思わないこと？ 志摩しま、能登のの、六条ろくじょう」

「そうでございますね、姫様」

「仰る通りにございます」

「全く、図々しいにも程がありますねえ」

百合は、顔を硬く強張らせて背後を振り返つた。

そこには百合の想像通りの者が、三人の女房を引き連れて立つていた。

「こちらも、お前きみがここに来ると思ひもありませんでしたわ。三さんの君」

「あら？ 奇遇なことにそちらもですか？ 百合お異母姉様ねえさま？」

その言葉には、刺々しい響きがたつぷりと含まれていた。

「お前に『お異母姉様』と呼ばれる筋合いはないわ！ 百々ももっ！」

百合は目を怒らせ、床をバンと叩くと鋭い目線で百々を射抜いた。

それを受けて、百々は憎らしいまでに落ち着き払った態度で、ぱちりと檜扇を閉じた。

「そうですか。それでは、大君とおおきみと呼ばせて頂きましょう」

その目線と言葉は明らかに毒々しく、百合は更に眼差しをきつくした。

百合には、妹が二人いる。

一人は柚麻瀬ゆませという名の、中の君なかきみと呼ばれる一つ下の同腹の妹で、もう一人が、今日の前にいる三の君　柚麻瀬と同じ年の、異腹の妹だ。

「大君。どうして貴女もここにいいのか、伺っても宜しいかしら？」

「あら。涼みに来る以外に何か目的がありました？」

百合はつんと澄まして言った。

「まあ？　ここは、『貴女のものではない』のに？」

それには意地の悪い棘が含まれ、百合は反応せずにいらなかった。

「何ですって？」

百合がきつく睨むと、百々は嘲るように笑い、胸を反らして言った。

「あら、だつてそうでしょう？　この家は元々、わたくしのお祖父様が持つていらした家よ。それをお母様にお譲りになられて、そこにお父様が貴女達二人を連れて来ただけじゃないの。それに、二親のどちらもが宮筋みやすじの血を引いているわたくしのお母様と、精々出世しても従五位下にしかねなかった父を持つ貴女の母では、比べるべくもないと思わなくて？　貴女が大君であつたとしても、ここは貴女のものじゃなくて、わたくしの物よ」

その言葉に、百合はカツとなつて立ち上がった。

「私だけでなく、お母様まで侮辱するなんて！　断じて赦せることではないわ！」

その言葉に、百々はせせら笑った。

「大君。貴女に、わたくしを赦す資格も赦さない資格もないわ」

「今に見てなさい！　今はそう言っていられるだろうけど、私が家を継いだらそんな口なんて叩けなくなるわ！　そうになったらお前もお終いね！」

勝った、と、百合は思った。

いくら百々が叫ぼうと、喚こうと、自分がこの家の大君であるという事実に変わりはなく、また大抵の場合は長女とその夫が財産を継ぐ為、この家を継ぐのは自分である。

そこを衝けば、この狡猾な異母妹でも、手出しはできない……はずだ。

しかし、百々はその言葉に、何の衝撃も、動揺も見せなかった。

「それこそ、そう思っていられるのは今のうちですわ、大君」

百々の言葉に、百合は眉を寄せた。

「何を言っているの？　私は大君で、貴女は三の君。もし私に何かあったとしても、家を継ぐのは柚麻瀬よ。お前じゃないわ」

その言葉に、百々はいきなり笑い転げ出した。

百合はそれに眉根を寄せて、淡雪を呼んだ。

「行くわよ、淡雪。三の君がいるのでは、ここは釣り殿ですらないわ。ここが釣り殿でないのならば、ここで涼む意味はないもの」

百合はそう言つと、立ち去ろうとした。

だが、百々はそれを許さなかった。

百々が、笑い過ぎて目尻に浮いた涙を拭って、嘲るように言ったのだ。

「あら、もう二十四になるというのに従八位上の位しか持たない、その親も従五位下の受領なんかの、金はあっても身分の低い貴族ではない男と結婚した女が、いくら大君でも家を継げる訳がないでしょう？」

その言葉に、百合の顔から血の気が退いた。

「お……まえ……どう、して……それを……」

「まあ、まだお話の段階らしいですけど、確定事項としても可笑しくはないそうですね。どんなに頑張っても従五位下にし

かなれなかつた男の孫としては、大変相応しいお話ですわ」

その言葉に、淡雪が食って掛かった。

「三の君様、その仰りよう、断じて聞き捨てなりません！ あたくしのことは何と言われようと構いません。ですから、その言葉はお取り消し願います！ 大君である姫様に失礼ではありませんかつ！」

淡雪の決死の言葉を、百々は鼻息一つで飛ばしてみせた。

「そんな物、必要ないわ。だって、この家を継ぐのはわたくしですもの」

その言葉に、百合は思わずへたり込みそうになった。

「何で……すつて？」

「当たり前でしょう？ だって、わたくしのお母様の親族は皆、宮筋の血を引いているんですもの。わたくしが家を継がなかったら、その方々に失礼ですわ。お父様から直に伺ったのですが、大君と中の君は受領などの金持ちに嫁がせて、いざと言う時の為にして、そしてわたくしは……」

百々は、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「今の式部卿宮様は正四位下で、御歳二十三の若い方ではいらつしやるけれど、幼かつた頃からとても博識なお方でいらつしやつて、主上から助言を求められることもしばしあることとか。そして、そのお方とわたくしが婚儀を執り行い、この藤原の家を継ぐのよ。お父様から直接聞いたことですもの。間違いはないわ」

その言葉に、百合は言い返すことができなかった。

ただ、呆然と百々のことを見詰めていた。

百合は、寝返りを打ちながら悶々と考えていた。

（どうして？ 私だって、お父様の子 歴とした中納言の大君なのに！ なのに、わたくしと柚麻瀬は厄介払いみたいに！ いくら三の君 百々の祖父母が宮筋だからって…… どうして、三の君には正四位下の位を持っている式部卿宮で、わたくしには従八位上の

兵衛府の^{ひょうゑふ}大志^{たいし}なの？　あまりにも落差が激し過ぎて、嫌になるわ。
階位^{かいゐ}にして十七階位も違うし、向こうは昇殿^{しやうでん}の資格もある、立派な
親王^{しんのう}で……)

百合は、思わず泣きたくなつた。

(宮筋の両親を持つている母親と、下級貴族の両親を持つ母親。それだけで、こんなにも違うの……？　同じ父を持つているのに……どうして、わたくしも柚麻瀬も……)

その時、カタン……という、小さな音がした。

(え……何……？)

百合が半身を起こすと、何やら人の気配がする。

そつと御帳台^{みやうだい}から這い出て、几帳^{きやう}の隙間から覗くと、確かに人が動いている様子が窺える。

百合は、全く警戒せずに几帳の隙間から滑り出た。

そして次の瞬間、呆氣に取られてしまった。

全く見知らぬ人が　しかも男が動いていて、唐櫃^{からびつ}に頭を突っ込み、自分の着物を手に取っているのだ。

見るからに怪しい、盗賊である。

だが、呆氣に取られたのは盗賊達も同じであつた。

互いに呆然と見詰め合う姿を、外から差し込む月明かりが照らす。その色は、いつもの黄色掛かった色と違い、僅かに紅みを帯びていた。

しばらくお互いに硬直していたが、先に動いたのは百合の方だつた。

男に顔を見られていて、しかも自分は単衣^{ひとえ}しか身に付けていないことに気付き、小さな叫び声を上げてその場にへたり込んでしまったのだ。

百合はこの男達が盗賊だと気付かず、ただ知らない男に顔を見られたと思い、必死に顔を隠そうとして檜扇を探した。

だが、それに盗賊達は安心したようだった。

百合がへたり込んでいるうちに、単衣や小袖^{こそで}、袷^{うちき}や袴^{はかま}、唐衣や裳^{からぎぬ}も

など、何枚もの百合の物である衣を奪い去っている。

そのことによく気付いた百合は、小さな叫び声を上げた。

「お前達っ……！ それは、私の物っ……！」

「うつせえな。ごちゃごちゃ抜かすんじゃない！ おめえ、貴族の娘なんだろう？ だったらこんなにくらでも手に入るつつうもんなだよ！ ちったあ融通してくれてもいいってもんじゃねえかい？ え？ こんな程度でめえらの懐なんざちつとも痛まねえつつうもんだからよ」

訛り混じりの凄まじい勢いで言い返され、百合は言葉を返すことができなかったが、実はその男の言った意味の半分も分からなかった。

ただただ、その男の勢いに吞まれていた。

だが、次の瞬間、目を極限まで見開いた。

「言うこと聞かねえと、殺すぞ。ん？ ちつとでも言葉を上げてみるや。すぐにてめえの首が飛んでっちまうぞ？」

男はそう言い、刀をちらつかせ、百合の喉元に突き付けた。

百合は、それだけで動く気力すら失せてしまった。

そして、部屋を物色されるのをただ呆然と眺めているしかなかった。

だが、ある物を掴んだ盗賊を見て、思わず悲鳴を上げてしまった。自分の顔が見られようと、喉が切り付けられようと、もう関係ない。

「……返しなさいっ！ どうか、それだけは……！」

それは、百合が九歳の時に死んだ母の形見の笛であった。

それまで、百合と柚麻瀬は母の屋敷に暮らしていたのだが、母が死んだ時には既に祖父母も親戚もいなかったので、父に引き取られ、この家の大君と中の君になったのだった。

「はっ！ こんなもんいくらでもあんだろうが。お貴族様なんだからよっ！」

盗賊はそう言うと、取り縋ってきた百合を蹴った。

「きゃっ……」

百合はその場に倒れ伏してしまった。

「おら、てめえら！ とつとつとずらかるぞっ！」

そう言つと、盗賊達は部屋から出て行つてしまった。

その時、百合の覚悟は決まった。

（何としても……お母様が遺してくれた笛だけは！）

百合は立ち上がると、笛を持っている男に跳びかかった。

「おわっ……！」

男は思わず声を上げて、笛を取り落としてしまった。

百合はすかさずそれを掴むと、大声を出した。

「誰か来てえっ！ 賊よ、盗賊よっ！ 誰か、誰かあつ！」

その大声に、盗賊達はぎよつとした。

「……てめえっ！」

百合の大声が効いたのか、それとも盗賊の気配に気付いたのか、辺りには少しずつ人の気配が集まって来る。

盗賊達は、笛を諦めて逃げようとしたが、頭領と思しき刀を持った男が、百合を凄まじい形相で睨んだ。

その凄まじさに、百合は思わず息を呑んだ。

「おめえのせいで、その笛は諦めなきゃなんなくなつた。その笛は結構高い値が付きそうだったのによ。しかも、大声を出して人を呼ぶときた。こんまんまじゃ、俺の腹の虫が治まんねえ。てめえには死んで貰うぜっ！ どうせおめえなんか、いてもいなくても同じこつたろっからなっ！ 貴族が一人死んだところで、俺ら庶民にや関係ねえからよっ！」

男は何とも身勝手な理屈を吐くと、刀を振り上げた。

（……お母様っ！ ……柚麻瀬っ！）

百合が着ていた白い単衣は、斜めに切られた傷によって紅く染まっていた。

百合は、しっかりと笛を握り締めたまま、ゆっくりと倒れた。その濁った瞳に、空で、紅く大きく輝く、満月が映り込んだ。

それを目にした途端、百合の濁った瞳は軽く見開かれ　そして、
何が可笑しいのか、小さくくすくすと笑った。

少し楽しげに、少し嘲笑うかのように。

そして、幼子のようにくすくすと小さく笑いながら、静かに事切れた。

第三章「平安ノ世、旧暦ノ水無月」（後書き）

水無月…六月の異称。ここでは陰暦であるから、現在の七月頃に相当する。

……本当に、ルビが多くて申し訳ありません。今回はちょっと趣味に走ってしまったので、分かりにくい言葉が連発してしまいました。でも、あまりスペースもないので、難しい言葉の解説をここに載せることはできません。ご了承ください。

第四章「縄文ト弥生ノ狭間、旧暦ノ弥生」

辺りはもう、日が暮れ掛かっていた。

母は夕日が照らす外を母は眺めると、溜息をついた。

「どうしたの？ お母さん」

「ねえ、ユリ……モモ、やっぱり帰って来ないのかしら？」

その言葉に、途端にユリの顔は曇った。

「……ごめんね、ユリ。今、この話はするべきじゃないよね……」
母がそう言つと、十七歳になったばかりのユリは小さく首を振つた。

父や弟妹達も、硬い表情ではあるが、母を慰める言葉を口にした。
ユリは食事を終えると、母をしつかりと見詰めて言った。

「お母さん。やっぱり、モモ連れ戻そうか？ いくら何でも……」
その言葉に母は狼狽えた様子を露わにしたが、小さく首を横に振つた。

「どうしてだよ？ 母ちゃん。だって、モモ姉ちゃんだけじゃん。
月神側に付いて隣村まで行っちゃったのってさ。父ちゃんも、母ちゃんも、ユリ姉ちゃんも、リヤ兄ちゃんも、僕も、妹のレイリも、弟のヘムサも、みんな太陽の女神様の側に付いたんだよ？ モモ姉ちゃんも異端なんだ。だから、そんなのどうでもいいじゃん」
ユリの十一歳の弟のシエムは、頬を膨らませて言った。

余程、モモのことが許せないらしい。

今、この村と近隣の村では、一大紛争とも言つべきことが起きている。

ユリ達の祖父母達がまだ子供だった頃、海を渡った向こうにある外^{とくに}国から、大勢の人が来たらしい。

彼らは素晴らしい技術や知識を持った人達で、たちまちこちらの人の間にとけ込み、その知識や宗教、住む場所などを共有することになった。

彼らがもたらしてくれた物は皆素晴らしい物だったが、それでも別の問題を引き起こしていた。

この地で暮らす人々は、月の男神を至高神として崇め奉っているが、外つ国から来た人々は、太陽の女神を至高神として崇め奉っていたのだ。

そのせいで、月神を崇める者と太陽神を崇める者の、いわゆる月神派と太陽神派の二派に分かれてしまい、結局は一緒にやっていけなくなり、同じ家族といえども、別々の村で暮らすようになってしまったのだった。

それは、このユリ達の家も同じだ。

ただ、こういう状況はとても珍しい。

普通は、家族が別れるとしてももつと大人数で分かれるものだが、この家では、モモだけが月神に付き、他の家族全員が太陽神に付いたのだ。

そのせいでモモとユリ達は絶縁状態になってしまい、母以外の家族全員がモモのことにとても腹を立てていた。

しかし母は、やはり母親だからなのか、絶縁状態が二ヶ月続いた今でも、未だにモモのことを諦め切れていないらしい。

（だったら、無理矢理にでもモモのことを連れ戻せばいいのに……全く、お母さんったら優柔不断なんだから……）

そうユリは思うのだが、そうもいかないらしい。

というよりも、母はそうしたくないらしいのだ。

どこか矛盾していると思っても、仕方ないだろう。

「どうでも良くないわよ。モモは貴方のお姉さんだから……」

母は僅かに眉をひそめて言ったが、ユリはそれに猛反発した。

「そんなの、どうでもいいわよ。外つ国から来た信仰を認めずに古臭い月神なんかを崇め奉ってるような女は、もう私の妹でも何でもないわ。そうでしょ？ リヤ」

「ああ。俺もそう思うよ、ユリ姉さん。モモ姉さんは、月神に付いた時からもう俺らの家族でも何でもないからな。みんなもそう思う

だろ？」

リヤは、父、レイリ、ヘムサの顔を順繰りに見詰め、三人がそれに頷くのを、胸を張って眺めた。

まだ十四歳の子供だが、やっていることは一端の大人気取りだ。

父も、そんな様子を微笑ましく眺めている。

母も、そんな様子を眺めて僅かに微笑んではいるものの、その顔は僅かに蒼褪めて、モモのことをとても気に掛けているようだ。

ユリは、僅かに頬を膨らませた。

（全く、お母さんにいらさない心配掛けて。あんなの家族じゃないって言っても聞いてくれないし。モモは月神を信じてうちからいなくなっただけ、お母さんの心まで持っていけだなんて一言も言っていないわよ）

次の日の昼頃、ユリと十歳の妹のレイリは、村を出て森の中に入って行った。

もう大分暖かくなって来たので、山菜などを採りに来たのだ。

他にも焚き木を集めるといふ役割もあり、片手で扱える小さな蛇のような物と荒縄も持っている。

「ユリお姉ちゃん、ほら！ ここにもあつたよ！ たらの芽っ！」

「うん。いい子ね、レイリ。でも、沢山は採らないでよ。理由は分かっているでしょ？」

「うん！ えゝつと、他の人とか動物が食べる為に残すんでしょ？ それに、あんまり採っても食べ切れないからっ！」

「正解。でも、それじゃあちよつと足りないかな。もう一つ付け加えるとする、私達が採り過ぎると、来年もこれが食べれないのよ。ちゃんと憶えておいてね？」

「はい！」

レイリはそう返事をする、せっせと山菜採りを続けた。

ユリはそれを微笑みながら見詰めると、焚き木を集めようとして

少し伸び上がって枝を落とし始めた。

すると、森の向こうの方に人影が見える。

ユリは手を止め、向こうをじっと見詰めた。

(……どうして？ だって、うちの村から出てこの森に入ったら、いくら獲物を追っていても、あんな所まで行く訳ないのに……向こうから来るとしても、隣村は離れてて……)

そこで、ユリははっとした。

(あ！ そうだ！ 隣村って……月神派じゃないのよっ！)

そう思うと、もういても立ってもいられなかった。

「ねえ、レイリ。ちよつとここで待ってて貰ってもいい？」

ユリは、緊張した声で言った。

「どうして？ 何かあるの？」

「うん。レイリにはちよつと危険だから、私が行ってくるわ。だからね、レイリ。しばらくここで大人しくしててね？ 絶対に怪我なんかしないように」

「うん、分かった」

ユリはそう言うのと、採った分の枝を手早く縛り上げ、一応の用心の為に鉋を持ってその人影の方に向かって行った。

「……ねえ、やっぱり、ここまで来るのって……」

「何言ってるのよ。ここに来るって言い出したの、メイラの方じゃない。それに、知ってるでしょ？ 狩りでも何でも、滅多にこっちの方に人が来ないって。でも、知る人ぞ知る山菜の穴場だってことも」

その声を聞いた途端、ユリは身体が少し震えるのが分かった。

二ヶ月振りに聞く声だった。

「ね、ほら、だれもいないって……」

「モモっ！」

ユリは、モモの言葉の途中で割り込み、姿を現した。

すると、その二人の少女はギョツとした顔で立ち竦んだ。

ユリはその二人の顔を見て、先程の会話に納得した。

モモは半年程前に隣村に移ったが、その時、とても仲の良かった、十六歳の同じ年の幼馴染も一緒に隣村まで行っていた。

それが、このメイラである。

ユリはすかさず二人の近くまで近寄り逃げられないようにした。

「お姉ちゃん……」

モモは愕然とした表情で言うと、はっとして慌てて身を翻そうとした。

だが、ユリはそれを許さずに、ぱつとモモの腕を掴んだ。

「痛っ……ちょ、放しなさいってばっ……」

「いいえ、放さないわ」

ユリの目は、徹底的に据わっている。

断固として放さないその構えを見て、モモは身体力を抜いた。

「何よ……あたしがいなくなったのなんて、どうでもいいんでしょ？ あんたらは太陽神、あたしは月神。それでいいじゃないの！」

モモの言葉に、ユリはゆっくりと頷いた。

「ええ、私はそうよ。私だけじゃなくて、お父さんも、リヤも、シエムも、レイリも、ヘムサもそうよ」

「だったら……」

「でも、残念ながらお母さんはそうじゃない。あんたが出てって二月以上になるのに、昨晚もモモが戻って来ないかってずっと気にしてたわ」

「……だからって、あたしにできることなんて何もないでしょっ？」

ユリは、その言葉に眉を上げた。

「顔見せるぐらいはできるでしょ？ それでお母さんに絶縁を突き付ければ、いくらなんでも納得するでしょう。何にもできなくは」

「それでも、あたしは絶対に嫌なの！ 太陽を崇める人が沢山いる所の空気を吸っていたくないのっ！ お母さんには、お姉ちゃんか

ら言つてっ！ あたしには……あたしには、もう無理なの！」
モモはそう言い放つと、ユリの手を振り解いて走り去ってしまった。

ユリは、どこか悔しそうにその後ろ姿を眺めていた。

「……ユリ……ユリ？ どうかした……ユリ？」

母の声に、ユリははっとした。

顔を上げると、母だけではなく、父や弟妹達も心配そうにこちらを見ている。

「あ……何でもないわ。ちょっとぼんやりしちゃっただけだから」

ユリは、無理に笑顔を作って言つた。

「でも変だよ、ユリお姉ちゃん。うちに帰って来てから……」

レイリは、心配そうに顔を曇らせた。

「大丈夫だつて。私は平気よ？ ちょっと疲れちゃっただけだから

……」

「そう？ あんまり無理しないでね、ユリお姉ちゃん」

「うん、分かつてる」

ユリはそう答えると、何かを決心したような笑顔を顔に浮かべた。

その夜、みんなが寝静まつた頃に、ユリはこっそりと起き出した。
(うん……みんな、眠ってるわね)

ユリは、足音を忍ばせて家を出た。

村を見渡しても、誰の話し声もせず、ただ風が吹く音と、木の葉が擦れるザワザワという音しかない。

ユリは軽く身震いすると、家の炉からこっそり取って来た火の点いた薪を掲げ、それと星明りを頼りに森の中に入って行つた。

森の中は暗く、昼間とは全く違う。

ユリは思わず身震いをした。

あまりにも違い過ぎて、少し怖かった。
だが、空には星や月が輝いている。
ユリは、隣村へと真っ直ぐに進み始めた。

「ここ……ね。ここが……モモのいる村……」

ユリは、そう独り言を洩らすと、辺りを見渡した。
ユリは、子供の頃に二、三度、この村に来たことがある。
だから、真っ直ぐにモモの所に行こうとしていた。
ユリはモモがどこにいるのか、詳しくは知らない。
だが、大体の見当が付く。

モモはこちらに移って来て、二月经つか経たないかというところだ。

だから、恐らくこの村の知り合いの家に泊まっていると予測できる。

そして、この村に住んでいて、一番モモと仲が良かったのは
(村長の息子だわ！)

そして、ユリは村長の家がどこにあるのか知っている。
それでも、ユリの家は村長の家だ。

だからこそ、隣村との交遊もあり、親しい人間もいると言える。
ユリはそつと村長の家に行くと、家の中を覗き込んだ。
だが、驚きに大きく目を瞠ってしまった。

中には、誰もいなかったのだ。

ユリは驚き、近くの家も全て覗き込んだ。

だが、年寄りも大人も子供も赤ん坊も……誰一人としていない。
ユリは、驚きのあまり立ち竦んでしまった。

だが、あることに気付いた。

(今日は満月だわ。あいつらが儀式を行っていても、可笑しくはない)
い)

ユリはそう思うと家を出て、村の外れまで行った。

すると、人々が輪になつて火を囲み、熱心に夜空の月に向かって祈りを捧げているのが見えた。

皆頭を垂れて、月を崇めている。

ユリはこっそりとその様子を窺っていたが、ふと輪から立ち上がった人影が目に入った。

炎が照らし出したその横顔を見て、ユリははっと息を呑んだ。

（モモっ……！）

モモはその輪から離れ、村とは逆方向に向かって歩き出した。なのに、誰もそれを止めようとはしていない。

ユリは怪しく思い、気付かれないようにモモの後を追った。

モモは森の奥深くへと、灯りを持たずに、けれども迷いもせず、ずんずんと進んで行く。

ユリは、最初は灯りを持っていたが、その灯りでモモに気付かれ兼ねないと気付き、行き当たった小川の中に捨てた。

そして、モモの後ろ姿を必死で追った。

大分、時間が経った頃だろうか。

モモの姿が急に消えた。

ユリは小走りになりモモが消えた辺りに行ったが、途端に納得した。

そこには、大きな洞窟が口を開けていたのだ。

中は暗いが、チラチラと炎が燃えているような気配がする。

ユリは意を決してその中へと入って行った。

（……深いわ。それに、暗い。いつまで続くの……？）

ユリは、灯りを捨ててしまったことを少し後悔した。

それ程までに、この洞窟は深かった。

だが、曲がり角に来た途端、人の声がして、ユリは思わず駆け出した。

すると、その角を真っ直ぐ進んだ先に、小さく組み立てられた祭

壇があり、そこでモモが跪いているのが見える。

そして、何とその目の前には、一人の青年がいた。

よく見ると、モモはその青年に向かって祈りを捧げているようだ。だが、その青年の見た目はとても変である。

この辺りに住む人も外つ国の人も、ほとんどの人の髪の色は黒や焦げ茶や茶色で、瞳は茶色だ。

だがその青年は、まるで淡い月光の色をそのまま封じ込めたかのような黄味の強い象牙色の髪を持ち、その瞳はまるで血を封じ込めたかのような紅だ。

見たこともないその色彩に、ユリは思わず呆気にとられた。

だから、その青年がまっすぐこちらを見たこともすぐに気付かなかった。

……気付けなかった。

「……誰だ、お前は」

その低い声で、ユリははっと現実に戻った。

そしてその声で、今までずっと跪いて一心に祈りを捧げていたモモは、驚く程鋭い顔と目付きでこちらをサッと振り返った。

「お姉ちゃんっ?！」

モモは、信じられないというように目を瞠った。

「そうか……これは、お前の姉か」

その男はそう言つと、鋭く光る目でこちらを見詰めた。

「それで、お前は どうしてここにいる。この少女……モモは」

男はそう言つと、先程の鋭い視線と比べると信じられない程に優しい目でモモを見た。

「とても熱心な信徒であり、優秀な少女だ。だが、その親族は皆アマテラスに付いたと言う。アマテラスに味方する者が、何故この村に来る?」

（『アマテラス』って何? 太陽の女神様の陣営の人達のことかな?）

ユリは意味の分からない言葉は無視することにして、クツと顎を

上げた。

「どうして私がここに来たのか、ですって？ そんなの決まってるじゃないの。その前にお訊ねしますけど、貴方、誰なんですか？ 名前は？ それに、モモとは一体どういう関係なんですか？」

その言葉に、男は僅かに顔をしかめたようだ。

「名を訊ねるならば、まず自らが名乗るべきだろう」

「あら、それは失礼致しました。私はこのモモの姉にして、隣のサミレの村の村長の長女、ユリと申します」

「そうか。私は、ツクヨミと言う」

「そう？ ではツクヨミさん、貴方はモモとはどういう関係ですか？」

「お前には関係ない」

その言葉に、思わずユリのこめかみに青筋が浮かんだ。

「関係ない、ですって？ よく言えたものね。……モモ、来なさい」

ユリはそう言うと、モモの所までスタスタと歩み寄った。

「こんな人と一緒にいるなんて許さない。戻って来なさい。ずっと私達の村にいらなくてもいいから、とにかく、お母さんに顔を見せに来て。そうでないと、絶対に許さないわ。力尽くても連れて帰るから」

ユリはそう言うと、モモの腕を強く引いた。

「いつ、た……ちよつと、放しなさい、つてばあ……！」

だが、ユリの力には勝てない。

しかし、そこにツクヨミが割り込んだ。

「待て。君はモモを連れて行くというのか？ アマテラスの所まで？」

「いいでしょ、別に。貴方には関係ないわ」

「いいや、関係はある。モモを連れて行かれては、私が困るのだ」

「そう、よつ……！ あたしは、ツクヨミ、様っ……月の、神様のつ……為に！」

その言葉を聞いた途端、ユリの頭の中で、何かが千切れた。

「何が月の神よっ……何がツクヨミよっ！ みんなみんな、みんなあんたを誑かしてっ！」

ユリはそう言うと、モモが先程まで祈っていた祭壇に近付き、その上に乗っていた供物やら何やらを、一緒にたにして薙ぎ払った。背後では、モモの鋭い悲鳴が聞こえた。

「何て……何てことをっ！ ユリ、貴女自分のやったこと分かっているのっ？！」

「勿論。月の神もツクヨミも貴女を誑かした疫病神よ。もう、ここにいることなんて絶対に許さない。一緒に帰るわよ」

だが、ユリの言葉が終わるか終わらないかのうちに、ユリは背後の壁に叩き付けられた。

喉元が、苦しい程締め付けられる。

ユリが薄っすらと目を開けると、ツクヨミの姿が目に入った。

「其方は我を侮辱した。……その代価、きっちり払ってもらおうか」

その紅い目は鋭く、ユリは本能的な恐怖を覚えた。

ユリは、その洞窟から引き出された。

ツクヨミの背後に、モモが随っているのが見える。

（モモっ……あんたはっ……！）

声を出そうとしても、喉を締め付けられているので声が出ない。

洞窟を抜け切ると、ユリは、それなりの広さのある原に引き倒された。

ユリは思わず咳き込み、薄っすらと涙を浮かべながらツクヨミとモモを見上げる。

「ユリよ。其方は、我を侮辱した。しかも、とんでもない勘違いを犯しているようだな」

ツクヨミは嘲るように嗤うと、言った。

「お前達の言う月神は、この私のことだ。改めて名乗ることとしようか。私は太陽神天照の弟で、月神月夜見と言う。それも知らずにこの私を侮辱するとは、愚かな娘だ。全く、これ程までに人の世に

は神の名が知られていぬものなのか」

月夜見　月夜見尊つくよみのみことはそう言くと、ユリに向かって腕を伸ばした。
「神を侮辱した罪　その生命一つで贖い切れれると思うな」

ユリは、あまりの恐怖に喘いだ。

「どうしようかな。どのようにして、罪を贖って貰おうか」

「月夜見尊様。あたしに、よい考えがあります」

モモの声に月夜見尊は振り返った。

「何だ？　モモよ」

「はい。夜空をご覧下さいませ。今夜は、見事な紅い満月にございます」

そう……今日の空には、月夜見の半身とも言える月が　それも、紅い満月が架かっていた。

「今、この場でユリをお殺しなさいませ。ですがそれだけでは、到底この罪を贖い切れません。ですから……」

モモは、酷薄な笑みを浮かべた。

「何回も転生させるのです。何度も、何度も。そして、今夜のように紅い満月が架かった夜に、ユリは殺される……それを何回も繰り返せば、罪を贖うことも可能かと思えます」

モモの言葉に、ユリは鳥肌が立つのを感じた。

（何を……何を言ってるの？　仮にも実の姉を……殺すと？　そう

……言うの？　貴女は？）

「そうか……それも、よい案だ」

月夜見尊は、ゆっくりとユリに歩み寄って来た。

ユリは腰が砕けて立てず、それでもこれには近寄りたくないという一念から、へたばったまま後退る。

だが、逃げ切れるものではない。

月夜見尊は、真上からユリを見下ろした。

「お前は、これからこの私を侮辱した罪を贖い続けるのだ。永遠に……永久にな」

そして、ユリの真上に手をかざした。

「嫌……嫌っ！」

ユリは、思わず悲鳴を上げた。

月夜見尊は、鋭く冷たい視線でユリを射抜く。

そして、どれだけの時間が経ったのか……月夜見尊は、かざしていた手を下ろすと、モモを促してその場を立ち去った。

ユリは、そつと安堵すると、立ち上がろうとした。

だが、立てなかった。

ユリは、愕然として自らの身体を見下ろした。

だが、どんなに踏ん張っても、ピクリとも動かない。

そのうち、だんだん身体から力が抜けてくるのが感じられた。

激しい目眩もしてくる。

そして、心臓がドクドクと脈打つ。

苦しい程、締め付けられているようで。

死んでも可笑しくない程の激痛が、ユリの身体を貫いた。

（嫌っ……っ、私、は、死に……たく、ないっ……！ 私は……私、はっ………！）

それがユリの、最期になった。

そして……これからの、『百合』としての、未来永劫続く贖罪の始まりとして。

第四章「縄文ト弥生ノ狭間、旧暦ノ弥生」（後書き）

弥生…三月の異称。ここでは陰暦であるから、現在の四月頃に相当する。

今回、太陽神と月神として天照大御神と月夜見尊の名前が出て来ますが、日本神話に基づいた話ではありません。ただ、適当な名前が思い付かなかったので借りただけなので、ご了承ください。

終章「〜平成ノ世、新暦ノ臯月〜」

「百々もも〜！ そろそろ保育園行くわよ。すぐに来なさい！」

「はい！ ママアッ！ でも、もうちよつとまって！ おねえちゃんにあいさつしてからっ！」

百々は大声で階下に向かって言うと、五年半程前 自分の産まれた日と同じ日に死んだ姉、弥風やかぜ百合ゆりの位牌に向かって、小さな手を合わせた。

この時代の『モモ』にとって、自分の誕生日は、同時に『ユリ』の命日でもある。

百々は熱心に祈っているように見えるが、それは上辺だけだ。

百々は、その年頃の幼子には全く似合わない、まるで大人のような……それも、老獪な人間でなければ浮かべられないような表情を浮かべ、嘲笑うようにクスツと小さな笑いをこぼした。

そして、小声で呟いた。

「全く、馬鹿みたい。月夜見尊様つくよみのこうさまに逆らって、その拳句、毎回毎回天寿を全うせずに死んじゃって……神が『赦す』には、どんなに時間が掛かるのか、全然知りもせずにねえ。ま、あたしは月夜見尊様のお計らいで、毎回天寿を全うできてるけどね」

そして、背の半ばまでに掛かる黒い髪を、鬱陶しげに掻き揚げた。百々には、産まれた時から、前世の記憶がある。

平安時代の頃も、江戸時代の頃も、そして今も、百々は全ての記憶を生まれ持っていた。

その上で、幼い無邪気な子供を『演じて』いたのだ。

その演技には、父も、母も、そして、一番憎い相手である『ユリ』も、綺麗に騙された。

そのあまりの単純さに、『モモ』は驚きを通り越して、哀れみのようなものも感じていた。

その愚かさと愚昧さに。

だが、感謝せねばならない。

『モモ』は、自然神を奉る宗教が衰退し、それどころか、神を信じていない者が大多数存在するようになった現代でも、月夜見尊に対する想いを 信仰を、失わずにすんだのだから。

前世を憶えていない為、愚かな振る舞いを繰り返す者と同じにならなくてすんだから。

『モモ』はどの時代に生まれても、前世を憶えている為、いつも賢く立ち回ることができた。

だが平安時代の頃は、まだ自分も怒りを完璧に殺すことができなかった。

それに、『百合』を蔑んでも構わないような むしろ、蔑むべき下地もあった。

だから、その思いの赴くままにいじめていじめて、いびり抜いた。しかし江戸時代の頃には、自分の感情を制することができた。

姉の『百合』を慕い、無邪気な振りを『演じる』ことができた。

だが、怒りが全くなかったかと言えば、それは嘘になる。

江戸時代の『百合』が殺された時には、あの縄文時代と弥生時代の狭間に生きた『ユリ』が死んでから、もう二千年以上も経っていたというのに、『モモ』は『ユリ』のことを赦すことは決してできなかった。

そして、実は百々はあの時、物陰からこっそりと百合が殺される所を見ていたのだ。

江戸時代の『百合』が、『妹』の『百々』を護る為 逃がす為に野犬を棒で打ち、必死で追い払おうとし、それでも敵わなくて、押し倒され、血に塗れて死ぬ所を。

そして最期の、記憶を取り戻した証の驚愕の表情を。

それを見た途端、百々は深い満足感に包まれた。

それ程までに、充実した気分になった。

実はその時、『百々』のすぐ近くまで、犬は来ていた。

だが、『モモ』は何も恐れなかったし、その必要もなかった。

何故なら、犬は狼との近似種であり、祖先が同一の動物である。

そして、その狼は、月の眷属。

おまけに、犬は狼よりも力の弱い生き物である。

月の神の加護を得ていた百々にとって、犬などは恐れる動物ではなかった。

怯える演技をしていただけで、内心、笑いを堪えるので必死だった。

そして、月夜見尊を心の底から感謝した。

だが、その月夜見尊は二回　『ユリ』と『モモ』だった頃も含めれば三回だけでは、まだまだ飽き足らないらしい。

ついこの前、この時代の『百合』は、確かに殺されたのだから。二千五百年程も同じ魂を持ち続けている『モモ』は、いかにも楽しげに笑った。

そして、『モモ』だった頃のことを思い出した。

『すまないな、モモよ。其方には、少し厄介な仕事を頼みたい』

月夜見尊はユリを殺した後、真剣な表情になってモモを見詰めた。『何でございましょうか？　あたしは、月夜見尊様からのお願いでしたら、例え死ねということでも躊躇わずに実行致すつもりです』

モモの言葉に、月夜見尊は苦笑した。

『そうか……いや、そう難しい仕事ではない。其方には、「ユリ」の監視をお願いしたい』

『監視……で、ございますか？』

モモが少し呆気にとられて言うのと、月夜見尊は頷いた。

『ああ、そうだ。これから、何度も何度も「ユリ」は生まれ変わるだろう。私は、そう簡単にあれを赦そうとは思わぬからな。モモには、そのどの時にも、「ユリ」の妹としていて欲しい。勿論、ただでは言わない。……やってくれるか？』

『勿論です』

モモは、一瞬も躊躇わずに頷いた。

それ程までに、月夜見尊は、モモにとって大切な神であったから。

『そうか。……では、その礼として其方には、どの時に生きていても必ず天寿を全うするように、私から加護を授けよう。そして、どの時に生きていても、それまでの世　前世の記憶を持ったままに』

『充分です、月夜見尊様。あたしは、とても嬉しいです』

『そうか……ありがとう、モモよ。感謝する』

月夜見尊はそう言っ立ち去ろうとしたが、ふと、思い付いたように言った。

『そうだ……「ユリ」が記憶を取り戻すのは、死の直前　夜空に輝く私の分身を見てからにしようか。ふふ……今からでも楽しみだな』

月夜見尊はそう言っ、モモの元から立ち去って行ったのだった。百々はその時のことを思い出すと、満足そうにニツコリと笑った。

「月夜見尊様。『ユリ』は、いつの世も、最期の時には記憶を取り戻しておいででしたよ。平安時代の時も、江戸時代の時も、あたしはそれを覗くことができましたから、それは確実です。どうして平安時代のことも知っているのかっていうことは、訊かないで下さいね？　だって、あの盗賊を手引きしたのは、あたしなんですから。物陰でこっそり覗いていてもいいじゃないですか。……月夜見尊様。あたしはとても嬉しいし、満足です。月夜見尊様のおかげで、天寿を全うすることもできますし。ただ、これには少し驚きましたね。あたしが、この時代に『産まれた』その日には、『弥風百合』は死んでしまったんですもの。ちよつとぐらいは、楽しませてくれても良かったんじゃないやありません？　こうして頑張っているあたしへのお礼として。ねえ、月夜見尊様。次は、もっと楽しませて下さいね？」

百々はそう言っ、床に手を付いて立ち上がった。

「ふふ、ほんつとくに、馬鹿なユリね。あんなに月夜見尊様に齒向かって、馬鹿な真似して　二千年以上も赦されないような罪を犯して。ほんつと、呆れるわ。呆れ果てて言葉も出ないって、こういうことを指すのねえ」

百々はそう言っ、位牌の写真に向かって、にっこりと微笑んだ。

「ねえ？ お姉ちゃん？」

その笑みは、まるで悪魔のような、魔性の笑みだった。
まだ五歳の幼子には、全く似合わない笑みでもあった。

「百々っ！ 早くしなさあ！ いっ！ もう行くわよっ！」

「はっ！ いっ！ わかつてるう！」

百々は、『わざと元気良く、子供っぽく』返事をすると、部屋を飛び出し、階段を駆け下りて行った。

仏壇の遺影の中では、一番最近の時代に産まれた九歳の『百合』であり、そして、この写真が撮られた時点で、既に二千五百年近くもの時を転生し生きてきた魂を持った『ユリ』という女性が、まるで何も知らないかのように、無邪気に、無垢なばかりの笑顔で微笑んでいた。

（終）

終章「平成ノ世、新暦ノ皐月」(後書き)

皐月…五月の異称。

『紅イ月』は、ここで完結となります。ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5899p/>

紅イ月

2011年2月23日12時55分発行